用具

〔蕪村發句解〕いでさらば投壺まゐらせん菊の花

投壺は禮記にありて、壺を置て矢をなげこむ事なり、三才圖繪には壺うちと假名をつけたり、京都その外、ちかきとし○天保頃専ら流行したる事あり、

〔投壺指南〕投壺凡例

一壺は三寸、二寸半、二寸、一寸六分、一寸五分、四寸、五寸あり、耳は三寸、二寸五分、二寸、一寸五分、一寸、七分、五分、四分あり、高耳、低耳、環耳、貫耳、四耳等あり、壺都て三十八品あり、

一籌は古籌、漢竹籌、羽籌、晉籌、九扶、七扶、五扶、四扶、三扶あり、

雜載

〔幽遠隨筆 坤〕投壺記

投壺（ツボウチ）の遊びは、其始既に久しく、禮記に投壺の篇有て、ことに漢武の世にくはしく、むかしは其籌も棘のおどろ〳〵しきを用ひしが、後は吳竹のすなほなるにかへ、其のりはいにしへによつてさだめ、其妙は今にいたつてきはむ、わざに長じたるものは養由が步をも耻ず、宗高が扇にも肝つぶさず、もろこしには王侯の前に宴の興をたすけ、我國には青樓の席に風流士の心を悅ばしむ、其かたち瓢に似てかしましからざれば、許由が譏りもなく、腹に赤小豆をたくはへながら、高辛氏が祭りにも奪はれず、一ッの口、鼻のごとく守り、二ッの耳、うき世の事をきかず、唯宴席に侍て樂みをことゝす、もとより是を投るに錢を賭せざれば、博奕のそしりをまぬかる、○中略 嗚呼いたれるかな、投壺々々、弓は袋に納めたれば、手をもつて籌を投げ、籌に簇なければ、そこなひやぶる事なし、實に太平の姿なり、壺中の赤小豆に千代をかぞへ、吳竹の矢に万世をいはひて、永く君が代の翫とすべしといふ、

〔投壺指南 序〕吾江南先生○田中清奉守山黃龍君之遺命、研究投壺禮、明和丁亥○四年秋來、始唱此道、然其傳秘諸帳中、而未敢敎諸世之校童焉、爾奈何好事者傳聲吠影、孟浪自放、甚者以代賭具焉、先生恨其